

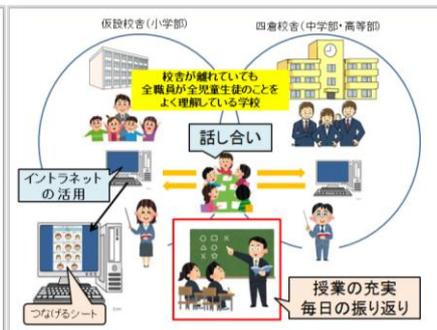
2017富岡支援学校 研修集録

- 1 はじめに
- 2 校内研修の観点
- 3 今年度の取組みについて
- 4 各学部の研修
- 5 特別支援教育研修会
- 6 各種シート様式について
 - (1) つなげるシート
 - (2) ICT情報活用シート
- 7 研修のまとめ
- 8 おわりに

※各PDF資料はダウンロードできます。ご活用ください。

H29校内研修のテーマ


「分かる」「できる」力を育てる
授業づくり
～実態にあった課題設定と発問等の工夫～



校舎が離れていても
全職員が全児童生徒のことを
よく理解している学校



1 はじめに

校 長 小河原 健一

本校がいわき市の仮設校舎での教育活動を開始してから6年目である。

当初、様々な困難に直面しながらストレスを抱えた児童生徒に対して、「分かる授業とは」「一人一人に寄り添う支援とは」をテーマとして研修がスタートした。それから数年、地域や関係機関の皆様の支援をいただきながら、本校の児童生徒は落ち着きを取り戻し、現在では明るく元気に日々の学習に取り組むことができている。

また、今年度四月には校名が「富岡支援学校」に変わり、さらに、中学部と高等部校舎を四倉高等学校に移転するなど、平成29年度は、まさに変化の年であった。

そこで、「校舎が離れても、全職員が全児童生徒のことをよく理解している学校」を目指して系統性、連携、共通理解などがますます強固なものになって行くよう今年度の研修テーマは、「分かる」「できる」力を育てる授業づくり～実態にあった課題設定と発問等の工夫～とした。

本研修を進めるに当たり、研修を支え、本校の教育活動にとって不可欠なものが毎日の「振り返り」である。児童生徒一人一人に対する障がいの特性、学習の課題、指導方針等を教師集団が共有する有効な手段であることはこれまでの実践で証明されており、我が校の看板の一つとなっている。

ずいぶん昔になるが、私が学生だった頃、指導していただいた先生から研究について指導された印象深い言葉がある。それは、「研究論文を読むときには、批判的に読みなさい。」という言葉だった。今、その言葉をもう一度かみしめてみれば、論文を肯定的に読むのではなく批判的に読むことによって、物事をより深く考えようとしたり、また、他の手立てはないか、自分だったらどのように展開するのかなど、より広い視野で捉えたりすることにもつながるといことなのだと思い至った。

この研修収録を手にした皆様には、ぜひ、深く、広く、時には疑いながらお読みいただければ幸いである。そうすることによって、障がいのある子どもたちの成長につながるより良い支援の在り方、考え方につなげていってほしいと心から願っている。



2 校内研修の観点

本校では昨年度、『考え、できる・表現する』力を育む授業づくり～『つなげる』体制づくりの工夫～』を研修テーマに、児童生徒がそれぞれの興味関心をもつものを増やし、自分ができていることをより多く身につけ、自分の気持ちや伝えたいことを他者に発信するための力を育むことを目標に授業づくりに取り組みました。

授業づくりで大切にすることは、教員間でその日の授業中の児童生徒の様子について振り返ったり、定期的に授業のねらいや支援方法のあり方を確認したりすることで、日々の授業の改善を図るということでした。各学部で年間を通して授業の改善を重ねる中で、教師からの言葉かけが少なくても自分がやることが分かって活動に取り組めたり、自分の伝えたいことをより詳しく表現したりできる子ども達の姿が見られるようになりました。年度末には、年間の校内研修で得られた授業づくりで大事にしたいポイントを「2016 授業づくり虎の巻」としてまとめました。

さらに、外部講師を招いて行った公開研修会の中では各学部の授業について参観いただき、「視覚支援によって学習内容を分かりやすくする」、「情報量を整理して内容を盛り込み過ぎないようにする」など、児童生徒の実態に合わせて授業を構成することについてご助言をいただきました。

今年度の研修テーマを設定するにあたっては、昨年度得られた成果を生かしつつ、本校の現状と今後の課題の解決を図ることを狙うことにしました。

東日本大震災後に児童生徒数が大きく減少した本校ですが、時間の経過とともに少しずつ子ども達の元気な声が増え、賑わいを取戻しつつあります。その中で、得意なところ、つまずいているところ、これから将来に向けて身につけていきたい力などは、それぞれに十人十色です。

一人ひとりの児童生徒の実態を見つめ、適切な課題設定や言葉かけ、発問等を行うことの重要性について改めて考えていく時期にあります。

そこで、児童生徒にとってより分かりやすく、日常生活や将来的な自立につながる確かな力を身につけられるような授業づくりやかかわり方について検討することを狙い、今年度は研修テーマを『分かる』『できる』力を育てる授業づくり～実態にあった課題設定と発問等の工夫～』としました。

年間の取り組みとしては、各学部で研究対象となる授業や学級を選び、そこで学習する児童生徒の実態や課題について共通理解を図ることで、授業内容や教員のかかわり方を検討するようにしました。取り上げる話題を授業づくりに限定せず、学級もしくは学部内での課題となっていることについても研修の対象とすることで、学習指導以外の生活面での指導にも繋げることができるようになりました。

また、本集録の編集にあたっては上記テーマを基にした各学部の研修に加え、OJL への取り組みや ICT 教育の充実に向けたシートの作成など、本校研修部の取り組みについても加えておりますので、併せてご覧いただければと思います。

3 今年度の取り組みについて

(1) 研修の日について

- ・基本的に「毎週火曜日」を研修の日とし、月1回は全体または学部の研修を行う。その他の火曜日は必要に応じてそれぞれの学部やグループで授業の振り返り等を行う。



(2) 放課後毎日15分の振り返りについて

<ねらい>

- ・各授業担当者間で授業改善について話し合うことを習慣化する。
- ・各授業担当者間でそれぞれ授業を工夫し共通理解を図る。

<方法>

- ・毎日放課後15時10分から15時25分を振り返りの時間とする。
- ・基本的に他の会議等は15時30分から実施する。



<各教科等のT1の先生へ以下の通り依頼した>

- ① 毎回、振り返りの実施の有無を授業担当者へ声がけする。
「振り返り始めます!」「今日はありません。」「回覧にします!」など
- ② 授業について振り返りの進行を行う。
※記録用紙は研修部作成の物でも学部独自の物でもかまわない。
- ③ 必要に応じて、振り返りの時間外でも、授業についての話し合いを行う。
※振り返りの方法は、自由にそれぞれ工夫する。
(例: 回覧する、記入用紙を配付しておく、参加できる人のみで行い記録を回覧など)
- ④ 振り返りは15分以内で 終了する。

研修部が声をかけなくても、各学部や授業者間で「やろう!」となることが理想です!!



(3) 校内研修・研究授業について



<ねらい>

- ・テーマを決めて学部等で年間を通して授業づくりと改善を行う。

<方法>

第一回 7月7日(金) 内山先生来校 四倉校舎(「5 特別支援教育研修会」参照)	第二回 12月8日(金) 玉井先生来校 本校舎(渉外部との共催)
<ul style="list-style-type: none">・内山先生の中学部・高等部の授業参観・生徒とのかかわりについての指導助言・放課後の「講演会」実施 参加者：全職員のみ・中高の教室でのフリートーク	<ul style="list-style-type: none">・玉井先生による小学部の授業参観・授業についての指導助言・放課後の「講演会」実施 参加者：全教職員、保護者・関係機関の方々・小の教室でのフリートーク

※別途、初任者研修、経験者研修Ⅰ・Ⅱの研究授業と事後検討会を実施する。

授業の参観と事後研への参加協力依頼。

(授業のビデオを放課後に上映する)

(4) 「つなげるシート」の作成について(「6 各種シート様式について」参照)

<ねらい>

- ・学部内、他学部の児童生徒について実態や課題を共通理解できる。

<方法>

- ・4つの観点からの実態とねらい、写真を多く入れたシートにまとめる。※別紙シート
- ・イントラネットで全員が閲覧できるようにする。
- ・昨年度作成分を活用、新入生分を新規作成、5月末頃までに全児童生徒について作成する。
校内ケース会議などにて活用する。



(5) 「OJLに関する意見交換と実技講習会」について

<ねらい>

- ・校舎が離れていても互いに学び会える職場を作る。

<方法>

- ・OJL担当者と連携
- ・アンケート実施など意見のとりまとめ、話し合いの場の設定を行う。
- ・実技講習会をOJL担当者と分担して行う。



(6) 教室フリートークについて

<ねらい>

- ・学部内、他学部の教室環境を見学しながら、児童生徒の実態や課題、指導の工夫などについて共通理解を図る。

<方法>

- ・研究授業で全員同じ校舎に集まったときに、フリートークを行う。
7月7日(金) 内山先生来校時 「四倉校舎」



(7) 「ICT授業活用紹介シート作成」について(「6 各種シート様式について」参照)

<ねらい>

- ・高等部生徒が個人で所有しているタブレット端末や学部のタブレット端末やパソコンなど、ICT機器を授業に活用する。

<方法>

- ・学級担任、学習グループ(教科、作業など)のT1が中心に作成する。
- ・授業にタブレット端末やPCなどを活用する。
- ・活用方法などを※別紙の紹介シートに記入する。
- ・12月末までに提出



(8) 各教科等の振り返り(教科会)について

<ねらい>

- ・各教科等の研究組織をもとに、それぞれの課題を明確にして学部間の連携を図る。
- ・「H30学習指導のための資料」を作成する。

<方法>

4月に、昨年度作成した「H29学習指導のための資料」を回覧等し周知する。

- ・年二回の係会を実施します。兼務している人もいるので二日間ずつ設定し実施する。

第一回4月25日(火)①、5月16日(火)② 第二回12月19日(火)①、1月16日(火)②

- ・教務部からの教育課程についての話し合いを行う。



(9) 研修に関する情報提供

- (1) 各種、県内・全国の研修案内
- (2) 研修図書コーナーの設置



4 各学部の研修

小学部校内研修のまとめ

1 今年度の学部での取り組みについて

小学部では、学部のテーマである「『できた』『わかった』『やりたい』気持ちを引き出す授業作り」を受けて、まずどのようなグループで、何について取り組んでいくのか話し合った。その中で、小学部を「1年生」「2年生」「3年生以上」の3つのグループに分け、それぞれのグループでテーマや実践する内容について考え、研修を行った。グループでの研修だけでなく、小学部全体での共有を図るため、報告会を設定し、全体で共通理解を図りながらすすめていった。

<1年間の取り組み>

月 日	実施事項	話し合いの内容
4 / 18	全体研修会	学部の研修の方向性について
5 / 23	グループ研修	グループの研修テーマ・学習集団について
6 / 6	グループ研修	各グループでの話し合い
6 / 20		
6 / 27		
7 / 11		
7 / 18	学部研修	各グループの進捗状況の報告
9 / 12	グループ研修	各グループでの話し合い
9 / 19		
9 / 26		
10 / 3		
10 / 17		
10 / 24		
10 / 31	中間報告会	各グループの進捗状況の報告
11 / 14	グループ研修	各グループでの話し合い
11 / 28		
12 / 12		
1 / 23		
1 / 30		
2 / 13	全体報告会	各グループの進捗状況の報告

2 実践の経過と結果

各グループのテーマと実践については、以下のとおりである。

(1) 1年生グループ

① グループのテーマ

- ・ 友だちと一緒に活動を楽しむ。
- ・ 教師の支援を受けて友だちと一緒に活動する。

② 学習集団・課題

- ・ 1年生グループ7名。
- ・ 学級の集団から小集団へ→集団活動の場面（体育的活動）
- ・ 友だちと一緒に、教師の支援を受けながら友だちと一緒に活動できる。
- ・ 実態差が大きい中で、満足感と達成感を満たす活動をどう設定するか。

③ 実践

- 週1回の活動→単元内容を2～3ヶ月の期間じっくりと取り組んできた。
 - ・ くぐる、またぐ運動
 - ・ ボール運動 ・ 体作り運動
- グループ編成→A・B二つのグループ分け。

- ・ A…教師と一緒にじっくりと
- ・ B…活発に運動、目標をきめてどんどん進めていく。

○児童とのかかわり

- ・ A…順番待ち、友だちとタッチ、友だちを待って手を出して。
友だちを意識して、友だちに向けてボールを転がす。
- ・ B…自分の目標、頑張ることを決めて取り組む。
「できた」を実感できる課題設定。あと一息。

○経過報告会後の体育の内容

- ・ 11月→マット運動、肋木
- ・ 12月、1月→サーキット運動
- ・ 週1回の授業のため2か月と長めに単元設定をした。

○授業の取り組み

- ・ マット運動を行うときからグループ編成を実態が偏らない形に変えた。児童がグループを意識するようになった。
- ・ サーキット運動を行うときから並び方を学級ではなくグループごとに並ぶようにし、児童につく教員を担任・担当関係なくつくようにした。また、係分担をして片づけを児童もするようにした。役割が分かって取り組むことができた。自分の役割を意識するようになった。
- ・ サーキット運動で自分で○のカードを置いて回数を数えるようにした。勝敗や自分の頑張りが見えるようになった。児童のモチベーションにつながっている。「できた・わかりやすい」教材の工夫となっている。

○児童の変化

- ・ 10月のおおすげ祭が終わり11月くらいから子供たちが落ち着いてきた。思うようにいかないことがあっても大きな声を出したり、体育館を飛び出したりすることがなくなった。
- ・トラックを走ることができるようになってきた。
- ・ ラジオ体操、準備運動では前を見て取り組むことができるようになった。映像を使ってラジオ体操を行ったときによく見て取り組めるようになってきた。
- ・ サーキット運動では今まで行ってきた運動を取り入れており、ひとつひとつの単元で取り組んでいた時よりできるようになってきている。自然に次々こなしていくようになってきている。できたことがうれしく、意欲を引き出すことができた。活動が見えており、分かりやすかった。

(2) 2年生グループ

① グループのテーマ

- ・ 友達や教師と仲良く活動する。
- ・ 簡単なゲームのルールがわかり遊ぶことができる。

② 学習集団・課題

- ・ 一人遊びが多い。遊びの幅が狭い
- ・ 誘い方やかかわり方がわからない。また何で遊んでいいかわからない。それぞれの自分のルールで遊んでしまう。

③ 実践

- ・ 大型遊具を使用した自由遊び
- ・ 追いかっこ（教師が追いかける）

→発展させ子どもたちが鬼役になった。

（鬼のかつらや鬼のバッチを使用し、だれが鬼なのか明確にした。）

→通常の鬼ごっこから手つなぎ鬼やしっぽ取り鬼などのルールのある遊びに発展。

- ・ みんなで遊びに行くためみんなとの遊びに参加することが増えた。みんなと一緒にがよい、自分は2年生だという自覚が出てきた。
- ・ 遊びのルールがわかって遊ぶようになってきた。
- ・ 自由遊びで怒らずにブランコを譲れるようになった。また、友達同士のやりとりが増えた。

→他学級に友達を呼びに行く・誘う・待つ・友達の近くに行く・友達の名前を覚えるなどのやりとりが見られるようになった。

○児童とのかかわりについて

- ・子どもの気持ちを受け入れつつ、自信を持たせるような声かけや励ましの声かけすることを教師同士で共通理解を持って取り組んだ。

○中間報告後の経過と結果

遊びを通して学年間のみならず下学年へのかかわりが増えた。遊びの幅を広げることやルールを守って遊ぶことを中心に行ってきた活動が、遊びの場面のみならず学年の合同学習（畑での野菜作り、おおすげ祭ポスター作りなど）に広がった。さらに、学年単位で校外学習に参加し、みんなと一緒に活動することで滞ることなくスムーズに行動できるようになった。なかよしタイムで遊んだ後に、学校内で行っている一列に並んでみんなで帰るといった活動が学校外でも生かされ、集団行動ができるようになった。毎日同じ時間同じ集団で遊びを取り入れたことで自分は2学年のメンバーの一員であるという仲間意識が芽生えた。だからこそ、みんなが動くから自分も動かなくてはという思いが強くなった。

(3) 3年生以上グループ

① グループのテーマ

友達と「できる」「やりたい」気持ちを引き出す授業作り

② 学習集団

- ・3年生以上グループ6名。
- ・合同の生活単元学習の時間（制作活動を中心に行う。）

③ 実践

○授業作り

- 7月 たなばた会をしよう～吹き流しをつくろう～（5時間）
- 9月 がんばろうおおすげさい～イベントの準備をしよう～（8時間）
- 10月 おおすげ祭に参加しよう～ステージ発表～
- 11月 版画を作ろう
- 12月 お楽しみ会をしよう～プログラムを作ろう～
- 1月 誕生会をしよう
- 2月 発表しよう～パフォーマンススペシャル～

- ・視覚的に活動内容や学習グループが分かるようにした。
- ・毎時間、同じ流れで学習を行うことで、見通しをもてるようにした。
- ・3つの固定のチームを作り、同じ友達と活動を行えるようにした。
- ・3つのチーム同士もかかわりがもてるように内容を工夫した。
- ・作った制作物を鑑賞、体験できる時間を設定した。
- ・2学期後半からは、制作活動は学級で制作したものを使った学習を中心に行った。
- ・発表活動でもチームを意識して活動グループを編成した。
- ・合同学習になるとチームでの活動を行う話をしなくても、チームごとに着席する様子が見られた。
- ・制作以外の発表活動でも、チームを中心に活動を行うことで、安心感をもって参加することができた。

○児童とのかかわり

- ・グループ内とグループ同士で、それぞれの児童がかかわりあえる場面を設定し、それらを促すような支援を行った。
- ・チーム内で役割分担をすることで、2人で協力して活動することができた。
- ・自分のチームで作った物を他のチームの教師や友達に渡すやり取りができた。
- ・今日の活動発表をチームごとに行うことで、自分のチームへ意識が向くようになった。
- ・回数を重ねるごとに、自然とチームごとに座ろうとする様子が見られた。
- ・チームの友達に「今日も一緒にがんばろうね。」と言葉をかける児童も出てきた。

(4) 小学部全体として

3つのグループの実践において、学部のテーマの「できた」「わかった」「やりたい」気持ちを引き出すための共通点がみられた。1つ目の「できた」を引き出すためには、同じ内容や友達と繰り返し取り組むことで見通しをもち自信・安心感をもてるようにすること。2つ目の「わかった」を引き出すためには、児童に合った教材を工夫すること、同じ学年、グループで行ったことで児童の仲間意識を引き出したこと。3つ目の「やりたい」を引き出すためには、仲間意識から友達同士のかかわりが広がり、繰り返し行った学習内容を発展させることで活動の幅を広げたことがあげられる。よって、それぞれの学年での段階に違いはあ

るが、共通して「友達と一緒に活動する」ことで、「できた」「わかった」「やりたい」気持ちを引き出すことができると確認することができた。

3 今後の課題

今後の課題についても各学年から、次のようにあげられた。

(1) 1年生グループ

- 2年生になると、週2時間となり、通常学級は教科になるので、より体育的な活動へとしていく。今の2年生以上の活動を参考に内容を考えていけるとよい。
- 体力をつけていくことも考え、楽しみな活動になるとよい。
- 遊びや合同の中で一緒に取り組めると良い。縦のつながりを作る。
- 学級の学習や行事が体育の学習に、体育が学級の学習や行事に生きるようにしたい。
- 学習の積み重ねを意識できるようにする。

(2) 2年生グループ

- ・見通しを持って集団で行動する力を育てる。
(どこまで行くか、どのくらいの時間行かなど数値的な部分が意識できるとよい)
- これまではタイマーがなったら終わりだったが、あと何分遊ぶなど時間を意識できるように授業の中で意図的に取り入れる。
- ・離れないで歩くことを徹底する。
- ・学級通信を活用し、ほかの学級や家庭の取り組みについて保護者へ伝える。
(保護者の横のつながりの強化)
- ・学級のみならず、学年の先生で学年の児童全体を見る。
- お互いにカバーし合う。
- ・畑の野菜作りを継続して行う。
- ・版画展だけではなく何度か学年合同の校外学習（遠足のお菓子を買に行くなど）を計画してみてもどうか。

(3) 3年生以上グループ

- ・固定のチームでの学習を中心に行ったため、違う友達との学習へ広げていく。
- ・もう少し大きい集団で活動が行えるようにする。
- ・活動内容の拡充。

(4) 小学部全体として

上述したように、学年によって、今後の課題は様々であることがわかった。

よって、それぞれのグループでの課題を学部全体で共有し、次年度である次のステップにつなげられるようにしていくことが必要であると考えます。

中学部校内研修のまとめ

1 今年度の学部での取り組みについて

中学部では、年度初めに各学級で「授業作り」や「生徒とのかかわり」において困っている課題を出し合い、学部全員で課題を共有し、課題解決に向けて研修を進めていくことにした。中学部の目標である「生徒が自ら考えて行動できる力」を育むために大切にしなければならないことや支援の仕方等を共有し、指導実践を行い、振り返り、指導の改善をしていった。

< 1年間の取り組み >

月日	学級	話し合いの内容
5/23		○今年度の方向性決定 ①授業作りについて <ul style="list-style-type: none"> ・ 1年…今後の学習の進め方（国語、数学を中心）について ・ 2年…生徒の行動のとらえ方（気持ちの理解）について ・ 3年…言葉の理解を深め、自分で考えて答えることについて（国語、数学、面接などを中心に入試や将来に向けて） ②生徒とのかかわりについて <ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の気持ちのとらえ方等において大切なことについて ・ 活動への参加を拒否する生徒とのかかわりにおいて
6/ 6	1年	・ 提示した課題に取り組もうとしない生徒への支援の仕方について
6/29	2年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師が生徒の気持ちを理解するための視点について ・ 生徒がよりわかりやすく気持ちを伝えるための手段とは
7/11	3年	・ 自分で考えて解いたり、発表したりする力をつけるには
9/12	3年	・ 問題行動が急増した生徒（N.K）の対応について
9/26	1年	・ 不適切なコミュニケーションに対する教師の対応について
10/ 3	2年	・ 生徒が自発的に動けるような自立活動について
10/31		全体研修会（中間報告）
12/13	3年	○課題設定・発問シート（中学部版）を活用して <ul style="list-style-type: none"> ・ 集団学習において教師の話に集中できない生徒への支援について
1/16	2年	・ 生徒が自ら動けるような生徒への指示の仕方について
1/23	1年	・ 気持ちを切り替えられず次の行動に移れない生徒の指導について
2/13		全体研修会（報告会）

2 実践の経過と結果

5月に研修の方向性を決め、中間報告までの6回は各学級の課題となっていることについて、みんなで話し合いを行い、課題解決のための手立てを記録していった。様々な立場の人から意見を出してもらうことで、学級のT・T間だけでは見えなかったことをいろいろな視点から考えることができた。また、今一番困っていることについて話し合いがもてたことで、その後の指導において学部全体で共通理解を図りながら一貫した指導をすることができ改善につながったと思われる。

中間報告以降の研修では、より研修テーマに迫った「課題設定や発問の工夫」に視点を向け、学部で記入しやすいように修正した「課題設定・発問等の工夫シート」を使って、話し合いの中で出てきた具体的な工夫を、シートに沿って記入していった。目に見える手立て（教室環境、教材教具など）と目に見えない手立て（発問など）に分けて記入することにより、普段無意識ながら工夫している声の大きさ、言葉かけのタイミングなどの話し方、意欲を喚起する別のもの等、目に見えない手立てを文章化していくことの大切さを実感した。文章化することにより、自分自身も普段の指導の仕方を再確認できたり、他の教師にも伝えやすくなったりした。また、実態に合った指導の傾向をつかむことができた。

<新シートの記入例>

課題設定・発問等の工夫シート 	
☆授業の中での、対象児童生徒の課題をいっしょって記入する。 対象生徒 14、51、授業内容「数学」、記入者「花園」、記入日 11月21日 17日	
1 教師の困り感	2 生徒の目標（教師の望む姿）
Mがもっとほめる	ちゃんとこつちむいていわれたことをやってほしい
3 話し合いの記録（アドバイス）	
目に見えるもの（教壇環境、教材教具の工夫など）	目に見えないもの（発問等：生徒の心境や言葉がけなど）
1. 黒板に授業の内容を書いて、お楽しみを最後にご置く。 2. 学習集団を分けたら？ 3. できる課題から行って、ほめて、自信をつけさせる。	1. この課題をやらなければ体育館に行かせないと伝える。 2. 学習の必要性を伝える 3. 自信を持たせる。 4. その時点での興味関心を大きく取り上げる。
4 実習にあった課題の設定（実態と変容）	
目に見える子立て→変容	目に見えない子立て→変容
1→授業の進め方によっては、お楽しみの時間が長くなってしまった。難しい内容を扱った時の担当は変わらなかった。 2→国語の時間に学習集団を分けたところ、情弱がいかに授業を担当した。内容、段階的に一緒に行えるのではないかと授業者間で相談した。 3→次第に自信をつける様子があり、興味した課題を提示したところ取り組むことがあった。	1→遠慮ながら取り組んだ。 2→実習への意欲と合わせ、全体的学習に興味を持ったり、就労に必要な内容だからと取り組もうとする様子が見られた。 3→おおすけ等実行役員、現場実習等で自信をつけ言葉で伝えようとする機会も増え、学習内容について相談することができたり、取り組まない理由が聞けるようになった。 4→現場実習や学館の行事などの話題から学習に引き付けることができるようになってきた。
5 取り組みの評価と今後の方針	
111 個別な子立て ・教師との関係づくりができれば自分の意見を伝えることができ、学習に向かうことができる。 ・目に見えない子立ての中で、学習の必要性を感じることでよかった。 ・生活全般の中で、自信を持ち自己評価が高まったことがよかった。 ・褒められることが意欲につながった。	
121 課題の達成状況・成長や変化 ・数学の時間にみんなと一緒に学習をした後に、興味課題を提示しても、意欲的に取り組むことがある。 ・問題が難しくったり、好きでないときに、理由を教師に伝えたり、自分のしたい学習を教師に言葉で伝えることができるようになった。	
131 次への改善内容 ・さらに学習内容の必要性を感じさせる。	

3 今後の課題

今年度の研修により、生徒理解の方法や課題解決のための指導の手立てがつかめてきた。しかし、様々な学習場面や生活場面での実践が足りず、生徒の変容まで確認できずに終わってしまった学級も多かった。今後、実際の学習や生活場面での指導を継続して行い、成果をまとめ、他の生徒においても有効な手立てであるかの検証を行い、学部内だけでなく学校全体で有効な手立てを共有できると良いと思う。

高等部校内研修のまとめ

1 今年度の学部での取り組みについて

高等部では、年度初めに学部の研修内容について<授業づくり>と<生徒とのかかわり>の2つの項目のアンケートを実施した。そこで挙げられた意見や年度途中での聞き取りなどから、高等部の教員が意見を述べ合ったり、共通理解を図ったりすることができるテーマについて確認し、研修内容として取り上げることにした。

授業づくりについては、複数の教科が研修の対象に挙げられた中で、「生徒の発語の力を伸ばしたい」、「習熟度の異なる生徒のどこにポイントをあてて授業づくりをするべきか」といった意見から国語科の授業について教員間で意見を述べ合いながら授業づくりのヒントを見出すことができるようにした。

生徒とのかかわり方については、「異性同士の身体の接触について」や「生徒同士の距離をどのように意識づけるか」など、性に関する指導について高等部ではどのように指導するかについて、教員間で意見を述べ合うことができるようにした。

<1年間の取り組み>

月日	実施事項	取り組みの内容
5/23	授業づくり 「高等部の研修内容の検討」 ○今年度の方向性決定	アンケートの結果をもとに学部で取り組む教科について検討した。
6/6	授業づくり 「国語科の授業について」 ○授業づくりへの意見交換	国語科の3つのグループに学部の教員を振り分け、各グループの生徒の実態や困り感を共有し、支援の手立てや授業づくりへの案を出し合った。
7/11	授業づくり 「国語科の授業について②」 ○授業の実践の確認	前回の研修後の授業についての報告に加えて、それぞれのグループで課題を再度確認した。加えて、その後の授業づくりについての意見交換を改めて行った。
9/26	生徒とのかかわり 「2学期の研修について」 ○内容の確認	年度初めのアンケートの結果から既に解決している項目や外部専門家を招いた研修で賄えるものを確認し、「性に関する指導」について意見交換の場を設けることにした。
10/10	生徒とのかかわり 「性に関する指導について」 ○アンケートの実施	「性に関する指導」の話し合いの話題として、日頃生徒とのかかわりや観察から気になっていることについて、アンケートで意見を集約した。
10/17	生徒とのかかわり 「性に関する指導について」 ○授業での指導内容や、教師で気をつけることの検討	前年度の保健体育で使用した教材を参考に、授業の中で生徒に伝えたいことについて検討した。また、高等部の生徒とかかわる教師側が気をつけるべき点について確認した。
1/23	授業づくり 生徒とのかかわり 「今年度のまとめ」 ○高等部での研修について	<授業づくり>と<生徒とのかかわり>のそれぞれに、今年度取り組んだ中で得られた成果や課題について意見交換を行った。

2 実践の経過と結果

<授業づくり>

研修を行うにあたって、高等部の教員を3つのグループに割り振った。これにより、通常の学級の生徒を対象に行われる国語科の授業づくりに、様々な視点からの意見や提案が出されることが期待された。

○口腔機能訓練の取り組み

6月の話し合いで「発語を良くするために口の体操を取り入れる。」という目標をたてたグループは、授業づくりの意見交換の中で口腔機能訓練に取り組んだ。

生徒が口を動かす様子を動画で撮影し、夏季休業中の課題にも盛り込むなど、年間を通し

て実践した。以前は長期休業の直後に発音の不明瞭さが目立った生徒が、休み前と変わらない明瞭さで話すことができたことなどは、一定の成果と考える。

その一方で、生徒によっては口を膨らませる運動やその後息を吹くことが難しい生徒もあり、風船などの教材を工夫した指導が有効か、という課題と改善策を1月の意見交換の際に発表した。

○「言葉を引き出すこと」への取り組み

6月の話し合いで学習グループの生徒の実態について確認し、「生徒の思いを引き出せるような手立て」について検討した。

話し合いの中で、対象の生徒が選択肢を提示すると自分の気持ちに近い物を選んだり言い換えたりできることを確認し、7月の話し合いの際には「手紙を題材にした授業づくり」を行うことについて意見交換をした。課題解決のための手立ては「サンプル作品をいくつか紹介する」「ある程度のフォームを作り、間に自分の気持ちを入れる」など複数の意見が挙げられた。「秋をテーマにした手紙」では、例文や短い言葉を繋げることができた。

1年間を振り返ると、対象の生徒は国語科の授業やそれ以外の場面でもたくさん発信をする様子がみられ、言葉のバリエーションが増えたことも感じられる。

<生徒とのかかわり>

年度初めにアンケートにより意見を集約したことで、生徒とのかかわりについて高等部の教員が気になっていること、あるいはどのようなかかわりが適当か不明確な点などについて把握することができた。

「性に関する指導」についての話し合いからは、他者との適切な距離のとり方（パーソナルスペース）や他者に見られたり、触れられたりするのが望ましくない体の部位（プライベートゾーン）など、生徒に伝えたい内容や専門的な用語について確認することができた。これらについては本年度の授業で取り上げられ、生徒同士で注意し合う場面が見られるなど、生徒の生活の中にその知識が役立てられていることがうかがえる。

また話し合いの中では「生徒への支援の際に、教師が手をひいたり身体を支えたりする行為が多すぎるのは望ましくない。」「同性介助を心がける。」などの意見も挙げられ、高等部という年齢層の生徒と接する教員としての心構えについても、学部全体で共通理解を図ることができた。

3 今後の課題

今年度の研修テーマである「『分かる』『できる』力を育てる授業づくり ～実態にあった課題設定と発問等の工夫～」を踏まえ、高等部では生徒の実態や日頃の生活の態度から学習上・生活上のそれぞれについての課題を整理し、具体的な取り組みについて話し合いの場を設けた。

複数の教員での授業づくりでより実態に合った支援の手立てや指導方法を実践できたこと、生徒とのかかわり方について学部全体で共通理解を図れたことは、生徒の学習環境を整える上で一定の成果を上げることができた。

一方で、授業づくりについて定期的に成果を確認したり、それを他のグループに伝えたりする機会をより多く設定することや、他のテーマで生徒へのかかわり方について話し合いの場をもつことが、学部の研修をより充実させることに繋がるものと考えられる。

授業の振り返りや生徒のケース会議など、他の業務と研修とをリンクさせていくことで、効率良く研修成果が蓄積することができるようにしていきたい。



5 特別支援教育研修会

7月7日（金）に大正大学 心理社会学部臨床心理学科の内山登紀夫教授を四倉校舎にお招きし、特別支援教育研修会を実施しました。今年度、校舎が分かれてからは初めての研修部主催の研修会でしたが、それぞれの学部の児童・生徒とのかかわり方を改めて考える機会となりました。

（1）中学部・高等部の教員への相談支援

当日は午前中に中学部と高等部の授業を内山先生に参観していただいたのに加えて、個別に相談をお願いした4名の生徒について、教師のかかわり方や校内掲示についてのご意見をいただきました。

高等部2年生の男子生徒の担任からの相談では、「特定の集団学習や授業中に活動がなくなったとき、服を脱いだり周囲の人の腕を掴んだりと言った行動が見られる」という生徒の気になる行動についてご意見をいただきました。

担任から「どんな時に」「なぜ」その生徒が不適応な行動をとってしまうのかを説明した後、内山先生からは集団学習では学習集団全体に向けた指示が多くなりがちで、相談の対象の男子生徒が活動内容への見通しを十分にもっていない可能性があるという意見をいただきました。またその対応策として、対象の生徒に向けて個別に予定を確認することで活動内容への理解を高めること、授業に入る教員と生徒とのかかわり方について共通理解を図っておくことの2点についてご助言をいただきました。

（2）全校教職員を対象とした講演会

午後は全職員を対象に、「『分かる』『できる』力を育てる授業づくり」をテーマにした講演が行われました。

講演では、医師として医療現場でかわられた方々の例を交えながら、支援を必要とする対象者のつまずきや困り感について詳細に評価をする中で、本人に合った環境や課題のレベルが分かり、より具体的な支援方法の検討が行えることを伝えていただきました。

また、講演のテーマに合わせて、写真やシンボルなどでより伝わりやすい情報の提示を行うことが学習者の「分かる」に繋がることについて、指導の事例を交えながら分かりやすく説明していただきました。

